

私のしごと～女性研究者として～



帯刀陽子

東京農工大学大学院工学研究院応用化学部門
[184-8588] 小金井市中町2-24-16
講師, 博士(地球環境科学).
専門は物性化学.
ytatewa@cc.tuat.ac.jp
<http://web.tuat.ac.jp/~tatewaki/index.html>

今回、「仕事と私事」の執筆依頼をいただきまして誠にありがとうございます。この欄には、男女共同参画の観点から「先輩からのメッセージ」を記すべきなのだと思いますが、筆者は、仕事も私事も胸を張って紹介できるようなことがありませんので、これまで研究に携わってきて感じたことや海外での研究生活の体験談などを紹介したいと思います。

筆者が研究者の道に進みたいと考えたのは、学生のときに取り組んだ「電荷移動錯体からなる分子集合体の研究」が大変興味深く、強く研究に惹かれたためでした。博士課程に進学して、自分で設計・合成した新しい分子の物性を明らかにすることがとても面白く、「より詳細な物性を解明したい」、「もっと新しい材料を合成してみたい」と思うようになりました。失敗ばかりの結果の中に、予想以上の特性が発現したときの喜びや達成感は何にもものにも代えがたいと考え、研究を一生の仕事として選びました。学位取得後は、産総研、信州大学、山形大学にて研究させていただいた後に、東京農工大学工学部で採用していただき、現在に至っております。東京農工大学では研究室を立ち上げ、なんとか運営することに精一杯な日々を過ごしています。

筆者は現所属に着任する前に、海外の大学で研究する機会を得て、1年間イギリスのエジンバラ大学で研究を進めました。エジンバラ大学は1583年に設立された、イギリスで6番目に長い歴史を有する国立研究大学で、そのキャンパスはスコットランドの首都エジンバラにあります。温かく研究室に受け入れてくれたNeil Robertson先生の下で、「太陽電池に用いる新規ホール輸送性材料の合成」や「電荷移動錯体を用いた有機トランジスタの特性評価」に関する研究に着手しました。しかし、英語がただでさえ苦手だった筆者にとって、スコットランドの英語は聞き取ることが困難であり、渡英早々、フラット探し、銀行口座の開設、電気水道等の契約など問題が山積みでしたが、研究室メンバーの助けもあり、なんとか生活を整えることができました。初めからこのような経験をしたことで、海外で何か問題が発生しても解決できないことはないと思えるようになり、前向きに海外での研究生活を送ることができ

たと思っています。

イギリスの研究室が日本の研究室と大きく異なる点として、女子学生、女性スタッフが多数在籍していることが挙げられます。ヨーロッパ中から集まっており、家族と離れて一人暮らしをしながら学位取得を目指す博士課程の女子学生が多いことも特徴だと思います。Neil先生の穏やかな性格も関係してか、所属した研究室の6割以上の学生・スタッフが女性であったことには驚かされました。女性の研究者の割合が、イギリスは日本の2倍以上であることを考えると当然のことなのかもしれませんが、学生のと時から男性のほうが多い研究室で過ごしてきた筆者にとって衝撃的な環境でした。研究室内においても、女性研究者と男性研究者が対等に議論し、お互いの性別の違いによる壁を作らずに研究室生活を送っていることから、個人の能力を認めている社会が当たり前になり立っているのだと感じました。

また、人生においてプライベートを重視しているイギリス人が多いことにも驚きました。実際、Neil先生も「金曜日は子供たちの面倒を見るから」と大学を休むことが多く、平日でも大学にお子さんを連れてくるが多々ありました。このように、家事や育児は夫婦で行うものであるという考えのもとで人生が成り立っていることには尊敬の念を覚えました。イギリスの大学では、育児休暇を取る男性研究者がとても多いことも、日本と大きく異なる点だと思います。このようなことが「当たり前のこと」として認識されていることが、結果的に、女性研究者の研究時間の確保や質の向上に繋がっているのではないかと考えます。日本では、夜遅くまで研究をすることや休日にも仕事をするのが良いとされ、むしろ、そうしなければならないといったような雰囲気がありますが、イギリスの研究者はワークとプライベートのバランスをうまくとっているように感じました。

最後に、今、筆者が研究室を立ち上げて、研究活動を続けることができているのは、周りの先生方のおかげだと思っています。仕事を投げ出したくなることもあります。そのようなときにいつも助けてくださる先生方に大変感謝しております。「研究者もいいな」と思ってもらえるような女性研究者になれるように、これからも努力を続けていきたいと思っています。